

平成22年度 生駒市子ども読書活動推進計画実践会議
主催講演会・第2回会議議事録（要約）

日 時： 平成22年10月29日（金）

主催講演会 『子どものふしぎ心をはぐくむ絵本

～どこからが、お空なの？～子どものつばやきに耳をかたむけて』

時間： 午前9時30分～12時30分

場所： 図書会館 市民ホール

講師： 森達夫氏(前・福音館書店編集部長)

第2回会議

時間： 午後1時20分～2時30分

場所： 図書会館 実習室

案件： 主催講演会の内容を踏まえて、講師を交えた意見交換

【委員】 岩崎れい、平井富久子、西村與里子、山中和幸、深田紀美子、
井上廣、松本陽子

（欠席）松田孝一、木戸直子、平田敦子、峯島妙

【事務局】 生田敏史、向田真理子、平澤佐千代、春名己容子（以上図書会館）
西野敦、上田修司（以上生涯学習課）

【助言者】 森達夫（前・福音館書店編集部長、講演会講師）

《講演会要旨》

知識の羅列、事実の列挙が科学ではない。生まれてから2足歩行するまでの過程は人類の発達そのもの。それをわずか10ヶ月程度で成しとげ、全身全霊でこの世界を把握しようとしている子どもたちに対して、そのつばやき、疑問に対する答えを大人が簡単に与えるものではない。まずは共感してあげることが大切。幼い子はどの子どもも好奇心でいっぱい。科学者にならない子どもたちにも、十分な好奇心が必要である。可能な限り、それを育てあげなければならない。（ご自身が携わってこられた作品等数冊の科学絵本を実際に紹介しながらの講演。）

講演会について

- ・ 科学絵本、知識絵本の幅の広さ、奥深さに気づかされ、色々な見方を教えていただいた。
- ・ 「知識の羅列、事実の列記が科学ではない」という言葉が印象的だった。
- ・ 子どもの疑問に先走って答を与えたりせず、自然と触れ合ったり子どもたちと会話していく中で答えを見つけていけるようにしたいと思った。生活し、遊びを体験してこそ見えることがある。
- ・ 子どもたちの自然に対する興味を大事にしたい。大人が皆そういう気持ちを持てればよいと思う。
- ・ 本といえば物語という固定観念があった。教師自身が意識改革し、理科的な発想も持って、子どもに本をすすめることができればよい。
- ・ おはなし会でも科学絵本を読み聞かせに使うようにしている、子どもたちはとても興味を持って聞いている。
- ・ 自然の不思議に対する疑問や感動を持っているが、中学生は素直に口に出さなくなるだけだと思う。
- ・ 子どもたちのつぶやきを聞いていて、こういうつぶやきを 100 歳になっても続けているのが、詩人のまどみちおさんだと思った。詩と科学に境界はない。

学校図書館について

- ・ 生駒市では現在、小学校 6 校の図書館に週 1 日司書を配置している。(2 名で 3 校を兼務) 来年度は小中学校全校(20 校)に配置予定。既に配置されている学校から、図書館の雰囲気が変わった、司書から助言をもらえて有難い、など好評を得ている。
- ・ 図書館担当の先生は担任も持っており、選書の時間もなかなかとれない。学校図書館司書と先生が、うまく連携をとっていければよい。
- ・ 中学校の図書館には科学的な本が少ないように思う。ブックトークなどで紹介してもらったら、子どもの興味につなげていけるのでよい。
- ・ 子どもたちは科学の本、文学の本という区別をしておらず、本をテーマ展示するなど工夫するとどの分野の本もよく借りられる。ただ、図書館に人(司書)がいないとそういう整備ができない。
- ・ 図書館に人がいれば、調べ学習の際にも、いろんな角度、視点から本を紹介できる。
- ・ ある私立小学校では、図書館に専任の司書を数名配置し、クラスで使える部屋もあって学習につなげる取り組みがされている。朝読の時間は司書おすすめの本を読むなど、連携がうまくいっている。やはり人の配置が大事。

子どもの“学び”について

- ・ 総合的な学習の時間を使って、子どもの興味や探究心を拾い上げて生かす取り組みができればいい。なかなか難しいが、“学び方を学ぶ”時間になればいい。
- ・ 最近は、調べ学習でもインターネットを使うことが多い。最近の子どもはめんどくさがりで、手間をかけるのが苦手。大学生でも、自分がどの情報が必要かわからない子がいる。
- ・ インターネットの情報は玉石混交なので、見極める目が必要。また、中身を理解していなくてもコピーして貼り付ければ使えてしまうが、それは自分の考えではないということを教えていかなければならない。
- ・ 図鑑で調べる時に索引の使い方を教えると、自分で探しやすい。疑問を調べ、解決したら次の疑問へ、とプロセスをふむことが大事。

(講師より)

習い事、ゲーム、テレビなどに費やす時間が増え、子どもたちの持っている時間が少なくなっているのはつらいこと。子どもにとっては、物語絵本も科学絵本も区別がない。『わたし』『せいめいのれきし』など境界線上の絵本もある。あまり意識せずに紹介してもらえたらよい。物語絵本を読み聞かせする時は、余計な言葉をはさまないようにして物語絵本そのものを味わえるように気をつけるが、科学絵本の場合はもう少し言葉がけをして子どもとのやりとりがあってもよいかもしれない。

森羅万象、あらゆる疑問にこたえる本はないが、まず大人が子どもと同じ目線でものを見て、子どもの話をしっかり聞いて、子どもの疑問に共感することが大事。